

平成二十三年度入学者選抜学力検査問題

国語

(配点)

5	4	3	2	1
28点	28点	28点	6点	10点

(注意)

- 1 問題用紙は指示があるまで開かないこと。
- 2 問題用紙は一ページから十四ページまでである。
検査開始の合図のあとで確かめること。
- 3 答えは、すべて解答用紙に記入すること。
特に指示がない限り、答えは現代仮名遣いによるものとする。
- 4 解答用紙の総得点欄および得点欄には記入しないこと。

1

次の各文の——線を引いた(1)から(5)までの片仮名の部分を、漢字に改めよ。(楷書で書くこと。)

- (1) 年長者をウヤマウ。
- (2) 王座にクンリンする。
- (3) 墓前に花をソナえる。
- (4) 親のイサンを受け継ぐ。
- (5) 会社の人事をサッシンする。

2

次の各文の——線を引いた(1)から(6)までの漢字の読みを、平仮名で書け。

- (1) 野の花を摘む。
- (2) 悪事を企てる。
- (3) 脈絡のない話。
- (4) 悔恨の念にかられる。
- (5) 昆虫のさなぎが羽化する。
- (6) 委員会に諮って決定する。

3

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

ことわざなどでは、しばしば、こう言われている。

かなしきときは身ひとつ

かなしきはわが身ひとり

「かなしい」ときは、人は孤独で、自分以外に頼りにするものはないという意味である。むろん、そうしたことはあるが、しかし、「かなしみ」という感情は、けっして自分一個に内閉されるものではない。むしろその表現や感受を通して、他者に開かれ、他者に呼応するといった、共悲・共苦の倫理性を成立させるものであった。

つまり、かぎりあることを「かなしむ」自己の有限性は、同じようにかぎりあることを「かなしむ」他者の有限性と、互いに「ああ」と呼びかけ、呼びか

けられる、そのような感情の連動・展開として「あはれ」が「あはれみ」に、「いたみ」が「いたましき(いたわしき)」に、そして「いたわり」へとつながっていく。それが倫理感情としての「かなしみ」ということであったが、ここでは、そのことを十分に押さえたいうえて、さらにそのさきにある問題について考えてみよう。

考えたいのは、たとえば、次のような場面である。

富士川のほとりを行くに、三つばかりなる捨て子の哀れげに泣く有り。^(注1)この川の早瀬にかけて、うき世の波をしのぐにたへず、露はかりの命を待つ間と捨て置きけむ。小萩がもとの秋の風、こよひや散るらん、あすや萎れんと、袂より喰物を投げて通るに

猿を聞く人捨て子に秋の風いかに

いかにぞや、汝、父に悪まれたるか、母に疎まれたるか。父は汝を悪むにあらじ、母は汝を疎むにあらじ。ただこれ天にして、汝の性のつたなきを泣け。

『野ざらし紀行』

芭蕉(一六四四—九四)の『野ざらし紀行』の冒頭すぐの場面である。富士川のほとりを芭蕉が行くと、三歳ほどの捨て子が哀れげに泣いていた。この秋風の寒さに、今日死ぬのか、あるいは明日死ぬのだろうかと思いつつ、袂から食べ物を与えて通り過ぎた、「猿を聞く人捨て子に秋の風いかに」という句を残した。と、どうしてお前は父に憎まれたのか、母に疎まれたのか。いやいや、そうではない。父はお前を憎んだのではないだろう。母はそのお前を疎んだのではないだろう。ただこれは、天命、運命であって、お前自身の性、持つて生まれついた身の不運を泣くほかないのだ。こうした文章に接して、それは、人としてあまりに冷たいのではないかと批判することはできる。とりわけ、ある不利・不遇な状況にある人に、「汝の性のつたなきを泣け」という言い方はひどいと非難することはできるし、あるいは、そうすべき場合もかならずやあるように思う。

しかし、この場合には、それはあたらない。自分ほぐぬくとした安穩なところにながらうしたのであれば、あるいはそうした批判もありうるが、⁽⁴⁾そうではないということである。芭蕉は、その直前でと詠んでいる。自分もまた、まもなく道に行き倒れて白骨を野辺にさらすことになるかもしれない、冷たい風がむやみにこたえるわが身であるよ、という思いを持つていて。

結局、わずかに食べ物を与えて通り過ぎていくのであるが、そこに倫理としての「かなしみ」がその限界を露呈しているということである。⁽⁵⁾この部分はフィクションで、芭蕉があえて書き足したという説もあるようであるが、捨て子という特殊な場面設定で、そのどうにもならなさを、よりわかりやすいかたちで表そうとしたということかもしれない。

どんなに「かわいそうだ。」と思ってもどうにもならないという問題は、それが、とりわけ捨て子でなくとも、われわれが有限であるかぎり、どこにでもありうる。「汝が性のつたなきを泣け。」とは、そうした、人が人としてあることの、どうにもならない有限性をそれとして受けとめよ、と自他に言い聞かせていると読むこともできるのである。

(竹内整「『かなしみ』の哲学』による)

(注1) 「この川の早瀬にかけて……捨て置きけむ。」この川の早瀬を見るにつけても、それに比すべきうき世での荒波(生活苦)に耐えることができず、この子の露のようにはかない命が絶えるまでの間と思つて捨てたのだろう。」の意。

(注2) 「猿を聞く人捨て子に秋の風いかに」猿の声に痛切な悲しみを詠んだ詩人たちよ。あなたたちはこの秋風の中で泣く捨て子の声をどのように聞くのであろうか。」の意。

(注3) 芭蕉||松尾芭蕉。江戸時代初期の俳人。代表作に『奥の細道』などがある。

問1 本文中に、倫理感情としての「かなしみ」⁽¹⁾とあるが、その説明として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から選び、記号で答えよ。

ア 自己の有限性を他者のそれと呼応させることによって、解消することができるような「かなしみ」。

イ 自他の有限性を自覚しそれをばねにすることによって、無制限へ開かれていくような「かなしみ」。

ウ 自他の有限性をもとに共感し合うことによって、相互の思いやりへとつながるような「かなしみ」。

エ 他者の有限性を感じし他者を励ますことによって、自らも生きる力を得られるような「かなしみ」。

問2 本文中の、ある⁽²⁾と同じ品詞の語を、本文中の||部アからエまでのの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 場面である イ あるいは ウ ある不利・不遇な状況 エ かならずやあるように思う

問3 『野ざらし紀行』の原文中に、小萩がもとの秋の風、こよひや散るらん、あすや萎れん⁽³⁾とあるが、「小萩」とは何をたとえたものか。『野ざらし紀行』の原文を除く本文中から五字以上十字以内(句読点を含む場合は字数に数える。)で抜き出して記せ。

問4 本文中の、そう⁽⁴⁾が指し示す内容として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から選び、記号で答えよ。

ア 芭蕉の行為は人としてあまりに冷たいのではないかと批判すること。

イ 「汝の性のつたなきを泣け。」という言葉はひどいと非難すること。

ウ 不利・不遇な状況にある人に「汝の性のつたなきを泣け。」と言つこと。

エ 安穩なところにながら「汝の性のつたなきを泣け。」と言つこと。

問5 本文中の空欄 に入れるのに最も適当なものを、次のアからエまでのの中から選び、記号で答えよ。

ア 野ざらしを心に風のしむ身かな

イ 分け入つても分け入つても青い山

ウ 旅に病んで夢は枯野をかけめぐる

エ 海に出て木枯帰るところなし

問6 本文中に、その限界を露呈している⁽⁵⁾とあるが、「その限界」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から選び、記号で答えよ。

ア 「かなしみ」という感情は、個々の事情を無視し一般化してしまうので特殊な場面では通用しないことがある、ということ。

イ 「かなしみ」という感情は、たとえ共有できたとしてもそれ以上は何もできず無力なままに終わることがある、ということ。

ウ 「かなしみ」という感情は、倫理的に生きるためには指針になったり助けになったりしない無益なものである、ということ。

エ 「かなしみ」という感情は、本人だけに感じられるもので他者にとってはとうてい理解ができないものである、ということ。

問7 筆者の主張と合致するものとして最も適当なものを、次のアからエまでのの中から選び、記号で答えよ。

ア ことわざが示すように人は孤独で自分以外に頼りになるものはなく、「かなしみ」という感情も他者と共有しえないのである。

イ 捨て子に助かる見込みがあると思つたからこそ、旅の途中で死ぬ覚悟をしていた芭蕉は食べ物を与えることができたのである。

ウ 『野ざらし紀行』の富士川のはとりの場面はフィクションであり、捨て子という行為を非難する意図で書き足されたのである。

エ 「汝が性のつたなきを泣け。」という言葉は、人としてあることの有限性の自覚を迫る言葉として読むことができるのである。

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

人間は、あるものについて便利だと思えば、その普及によって社会全体にどのような影響が及ぶのかを考えることなく、自分の都合だけで、受け入れてしまう。

たとえばクレジットカードを考えてみよう。最初のうち、日本人はなかなか受け入れなかった。それは、取引の相手を完全に信用できないと思われるからである。

電話や携帯電話も同じだ。普及しはじめた頃は、電話が中継局で盗聴されるかもしれないとか、携帯電話の電波が途中でだれかに受け取られて盗聴されないかなどと心配した人も多いただろう。しかし、電話や携帯電話をみんなが使い出し、それがないと社会生活も営めないようになると、盗聴されてプライバシーが侵されるといふ懸念はすっかり忘れて、逆に使わない人を変な人だと思ってしまう。

このように、クレジットカードや電話や携帯電話など、人をつなぐ新しいものが世の中に出ると、はじめのうちは信用できずに使うことを躊躇するが、多くの人が使い出すと、自然に自分の中に信用が生まれ、その危険性を忘れて使い出すようになるのである。

ここに人間社会のおもしろさがあると思う。みんなが使い出して、それが人と人を何らかの形でつなぐものであれば、自分も使ってしまう。その結果人間社会にどのような影響が及ぶかについては、そのときは考えることはできず、のちにさまざまな現象が生じてから、改めて考えるようになる。インターネットは、人間社会に非常に大きな影響を与え、いろいろな変革をもたらした。人間に新たな世界を与え、新たな可能性も引き出したが、同時に多くの問題ももたらしている。しかし、そういったものを受け入れて社会そのものが変化してしまうと、簡単に後もどりでできなくなる。

人間は、生物としては、短い時間で進化することはできない。しかし、新しい技術をどんどん受け入れていくそのさまは、人間が社会全体として進化しているように見える。

ロボットは、パソコンにセンサやアクチュエータがひつついたようなものである。(注2) ロボットを制御しているのはパソコンそのものだからである。そして、世の中でさまざまなセンサが使われ、自動ドアや動く歩道や自動車が受け入れられている現在、その延長線上で、ロボットが徐々に人間社会に浸透し、それを変革しながら、人間の生活になくてはならないものになるのは、それほど遠い将来ではない。もしかしたら、我々はすでにそのような時代にいるのかもしれない。

むろん、ここで言うロボットは、工場の中で働くロボットではなく、人間と関わり、ロボットの向こうに、電話や携帯電話と同様に人間を連想させるものである。人と何らかの方法で関わるロボットは、パソコン同様に、知らず知らずのうちに人に受け入れられ、気がついたときには世の中を大きく変えてしまう十分な可能性を持っている。

こういったことは、電話やパソコンの普及から類推すれば、比較的簡単に気がつくはずだが、それでも、ロボットだけは特別な扱いを受ける。「ロボットは人間を支配しますか？」という疑問を持たれるのである。その理由は、やはり、ロボットが人間そのものを映し出す鏡であるからで、そのロボットをいわば新たな人種のようなものとして感じてしまうからであろう。逆に言えば、「ロボットは人間を支配しますか？」という質問をする人は、しない人よりも、強くロボットの可能性を実感しているのかもしれない。

A、この情報化社会・ロボット化社会に対する懸念がまったくないわけではない。人と人をつなぐ情報機器が発達してくると、かえって人は人のことをあまり考えなくなるといふ、反対の側面も出てくる可能性がある。

電話のない時代には、手紙をやりとりした。手紙のやりとりには時間がかかるので、その分、いろいろと相手のことを思い、想像して、手紙を書いた。それが電話ですぐにつながることができると、相手のことを深く考える前に、話ができてしまう。携帯電話にいたっては、気になったときにすぐ相手とつながることができるため、相手のことを考える時間はほとんどなくなった。

B、技術の発展に伴い、人間は他の人間のことを深く想像することなく、単なる情報交換ばかりをするようになってきている。言い換えれば、人間は、ずいぶんと身勝手になって、単に通信するだけのような機械になりつつある気さえする。

C、新しい技術や情報機器を受け入れるためには、人間そのものがより賢くならなければならない。哲学を持たなければならぬと思う。ロボットを作ることは、人間とは何かを知ることだ。(注3) 先に、「人間はすべての能力を機械に置き換えながら、その後何が残るかを見よう」としている。「という話をした。これはまさに哲学であるが、そのような哲学を持たずに、単に便利だからその道具を使うということをするれば、人間は逆に機械のようになっていくと思う。技術が進歩すればするほど、人間そのものに対する深い興味と洞察が必要になってくる。」(石黒浩「ロボットとは何か——人の心を映す鏡」による)

(注1) 躊躇＝決心がつかず、ぐずぐずすること。ためらうこと。

(注2) アクチュエータ＝機械・装置などで、入力したエネルギーを物理的な運動に変換する機械要素。電気モータや油圧シリンダなど。

(注3) 先に……話をした。＝問題として取り上げた本文よりも前の章において、筆者はこのようなことを述べている。

- 問1
- A から C までに入る語の組み合わせとして最も適当なものを、次のアからエまでの中から選び、記号で答えよ。
 - ア A Ⅱ Ⅲ Ⅳ B Ⅱ Ⅲ Ⅳ C Ⅱ Ⅲ Ⅳ D Ⅱ Ⅲ Ⅳ E Ⅱ Ⅲ Ⅳ
 - イ A Ⅱ Ⅲ Ⅳ B Ⅱ Ⅲ Ⅳ C Ⅱ Ⅲ Ⅳ D Ⅱ Ⅲ Ⅳ E Ⅱ Ⅲ Ⅳ
 - ウ A Ⅱ Ⅲ Ⅳ B Ⅱ Ⅲ Ⅳ C Ⅱ Ⅲ Ⅳ D Ⅱ Ⅲ Ⅳ E Ⅱ Ⅲ Ⅳ

問2 本文中の人間社会のおもしろさとは、どのような点を指していったものか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から選び、記号で答えよ。

- ア 人をつなぐ新しいものにはじめは警戒するが、多くの人が使い始めるといつの間にか信用するようになり、それを受け入れてしまう点。
- イ 人をつなぐ新しいものが次々と生み出されても、なかなか信用することができずに、過剰な心配をして使うことをためらってしまう点。
- ウ 人をつなぐ新しいものがいったん世の中に出てしまうと、使うのが当たり前になり、それなしには社会生活が営めなくなってしまう点。
- エ 人をつなぐ新しいものが普及すると、それが人間社会に与えるかもしれない影響や危険性を、まったくふりかえらなくなってしまう点。

問3 本文中に、簡単に後もどりでできなくなる。とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から選び、記号で答えよ。

ア 新しいものの普及によって広がった世界は現実とは違うのだが、いったんそこに楽しみを見つけてしまうと元の日常には満足できなくなってしまうから。

イ 新しいものの普及によって自分の可能性を拡大してきた人間にとって、それを失うことは自らを否定することにつながり、容易には受け入れがたいから。

ウ 新しいものを受け入れることで社会全体が大きく構造を変えてしまっているので、以前の状態に戻そうとすると、新たな不都合が生じる恐れがあるから。

エ 新しいものを受け入れることで発生した問題は非常に複雑であり、それを解決するには新たな科学技術を開発することで社会を進歩させるしかないから。

問4 本文中に、特別な扱いを受ける。とあるが、これはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から選び、記号で答えよ。

ア ロボットは他の機器に比べ利便性が高く、社会に深く浸透し得るものとして優遇されるということ。

イ ロボットは他の機器よりも人に近く、ある種の人格をもつようなものとして警戒されるということ。

ウ ロボットは他の機器ほど普及はせず、社会への影響もあまりないものとして軽視されるということ。

エ ロボットは他の機器と同様に広く受け入れられ、社会を変えるものとして重要視されるということ。

問5 本文中に、人間そのものがより賢くならなければならない。とあるが、「より賢くなる」の説明として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から選び、記号で答えよ。

ア 道具を通信のみを使用するのではなく、より広く人間社会に役立てる方法を工夫する。

イ やりとりする相手を気遣い、相手の置かれた状況をより深く想像する力を身につける。

ウ 新しいものだけにとらわれることなく、古いものもより大切にしようとする心をもつ。

エ 人間に対する興味を失わずに、人間そのものをよりよく理解しようとする姿勢をもつ。

問6 本文中に、人間は逆に機械のようになっていく。とあるが、これはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から選び、記号で答えよ。

ア 新しい技術や情報機器を使用することのみにとらわれ、他のことにはまったく関心を示さなくなるということ。

イ 現状では人が行っているようなこともすべて機械に処理させるようになり、道具に頼りきりになるということ。

ウ 他人を思いやったり人間とは何かを深く考えたりすることなく、単に道具を使うだけの存在になるということ。

エ 技術の進歩についていこうと必死になるうちに、人間の方が機械に使われているような状況になるということ。

問7 本文の論の展開についての説明として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から選び、記号で答えよ。

ア 人をつなぐ新しい機器を社会が受け入れていく様子を指摘した上で、ロボットと人間との関係に言及し、これらの機器やロボットを使う人間のあるべき姿を論じている。

イ 人をつなぐ新しい機器に対する人々の評価を提示した上で、それらと一線を画すロボットの存在について言及し、ロボット化社会特有の問題とその対応策を論じている。

ウ 人をつなぐ新しい機器とロボットとの共通点について言及し、それらが今後どのように発展するかという見通しと、それらを使いこなすべき人間の心構えを論じている。

エ 人をつなぐ新しい機器やロボットが人間を支配している現状に言及し、機械に依存し想像力が薄れつつある社会への懸念と、それを解消する哲学の必要性を論じている。

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

秋の体育祭と文化祭が終わると、急に空が高くなる。空気の匂いが変わる。香ばしさが風にかすかに混じり、住宅地の中を抜けて行くだけなのに、みよりの季節が近づいているのがわかる。ようやく穏やかな日々が戻ってくる。体育祭や文化祭の賑々しさが私は苦手だ。今さら走ったり、踊ったり、新鮮味のない模擬店を出したり、そういうことをさせられるのが億劫でならない。終わってほっとした。退屈な日常でも、喧嘩よりはいい。それなのに、まだ。ホームルームの最後に、そろそろ合唱コンクールの準備を、と佐々木さんがいったのだった。何がそろそろだ。文化祭が終わったばかりじゃないの。ひとつ終えるとまたひとつ、秋は行事のペースが速くなるらしい。

「まだ少し先のことですけど、早めに準備して、いい結果を残せるといいなと思っています。」
クラス委員の佐々木さんはそう締めくくった。合唱コンクールなんて興味もないけれど、それでも、いい結果を残せるといい、というのはちょっと違うだろうと思ってしまう。結果を残すために歌うんじゃない。結果の前に原因がある。あるいは、過程。そっこのほうが大事なんじゃないのか。

——ついそんなことを考えてしまってから、関係ないと思う。私にはどうでもいいことだ。そしてたぶん、クラスのみんなにとっても。毎年、秋の終わりにクラス対抗の校内合唱コンクールがある。仲間と力を合わせ、声を合わせよう。そう書かれたポスターを去年も見ている。力を合わせるために声を合わせるのか、声を合わせるために力を合わせるのか。どちらが正しいというものでもないだろうけど、私はポスターの前で立ちどまった。クラスの団結が目的で、合唱は手段になってしまっている。歌を利用してのことへの軽い憤りを、どうでもいいじゃないそんなこと、と声に出してかき消した。

そもそもたいていの生徒にとって合唱コンクールの優先順位は低い。校内イベントの中でも最下位か二番手、三番手あたりをうろろしていると思われる。マラソン大会といい勝負かもしれない。むしろマラソンのほうが嫌われている分だけ存在感がある。合唱は歯牙にもかけられずその辺に放っておかれている。

そういえば去年、熱心なクラスがあった。担任の力なのか、誰か指導力のある生徒がいたのか、あるいは合唱部に属する生徒が多かったのか、見事な歌声を聴いた。校内合唱コンクール程度でここまでの合唱を聴けるとは思っていなかったほどだ。

最初は放課後だった。校舎のどこから合わせる声が聞こえてきた。たどたどしく、おそるおそる、の声。ちようど今ごろの季節だったと思う。まるでばらばらに聞こえる日もあった。それが日を追うことにまとまっていた。張り上げていたソプラノに艶が出て、アルトがぐんと響き出す。そうそう、その調子、と私は靴を提げて校舎をぐるぐる歩きまわった。生徒玄関まで行くと声は届かなくなってしまうから、わざとゆっくり階段を上り下りした。普通の生徒でも練習次第でこんなに変わるのかと胸を打たれていた。

それに比べ、私のクラスは話にならなかった。おざなりな練習しかせず、それだつて不参加の人が多くて、もしかすると楽器なしでは最後まで歌えない人もけっこういたかもしれない。誰もなり手がなくて結局ジャンケンで決まった指揮者が機械的に指揮棒を振るだけで、私も声を出さなかった。声楽の発声で合唱はできないし、歌って目立つのも嫌だった。

クラス替えはあったものの、今年だつて似たり寄ったりだ。そろそろ合唱コンクールが、と佐々木さんがいったとき、しらっとした空気が流れた。文句さえ出なかった。もちろん、私も同じだ。関係のない話だと思つた。この高校に入ってからというもの、すべてのことが私には関係なく過ぎてゆく。

② 翌週のホームルームで議題が合唱コンクールのことになったときも、私は窓から外を眺めていた。中庭の櫓が色づいている。いい季節になった、と思う。湿度も湿度も適度にあつて、声帯に弾力が出る。声が伸びる。音大の受験を考えるなら、そろそろ本腰を入れて準備をしなければいけない時期だった。

「誰か、指揮をやりたい人、やってもいい人、いませんか。」

議長^①の佐々木さんが壇上から呼びかけている。指揮なんかやりたい人がいるわけがない。どうせまた決まらなくてジャンケンかクジになるんだろう。

頰杖^{ほほづえ}をついて、高い空に飛行機雲が伸びていくのを見上げたとき、

「御木元さんがいるでしょ。」

という声があった。驚いて声のほうを見たけれど、誰だかわからなかった。

「そうだ、御木元さんがいるじゃん。」

「御木元さんがやればいい。」

教室のあちこちから声上がる。そのとき、わかつた。みんな、知っていたのだ。私が御木元響^{ひびき}の娘だということ。そしてきつと、音大の附属高校に落ちてここにいることも。

さざ波のように広がった声はとても好意的には感じられなかった。母親が音楽家なのだから娘もそれなりに何かできるはずだと、ただそれだけの理由で自分たちの厄介ごとを押しつけようとしている。

「御木元さんがやってくれたらいいと私も思います。」

立ち上がったそういった人がいた。声^③が素直で救われた。

議長が私を見た。

「お願いできますか。」

「何を。」

聞き返すと、発言者はもう一度立ち上がり、恥ずかしそうにちょっと振り返って私を見た。

「指揮か、ピアノ。それか、指導だけでもいい。」

「どうして私が。」

すると彼女はほんの少しためらった後で口を開いた。

「御木元さんは音楽が好きそうだから。」

虚を衝かれて返事ができなかった。

「お願いできますか。」

もう一度議長に聞かれて、うなずいていた。音楽が得意そうだから、といわれていたら断っていたかもしれない。でも、音楽が好きそうだからというあまりに素朴な声に少し気持ちがほどこけた。音楽が好きかどうか、今となつては自信もないのだけれど。

「じゃあ指揮を。」

私が答えると、黒板に、指揮・御木元玲と書かれた。

ピアノはいつまでも決まらなかった。弾ける人がいないわけでもないだろうに、名前の挙がった人同士で押しつけあっている。渋々弾くようなピアノを聴くのは苦痛だ。

あ、と思った。さつき私を指名した人。今まで話をしたこともなかったけれど、たしか音楽室でピアノを弾いているところを見たことがある。同じクラスになる前だったはずだ。音楽の授業の後で忘れ物を取りに戻ったら、ボブというよりはただ切り揃えただけみたいな髪型の小柄な子がひとりであれしそうにピアノを弾いていた。私が見ているのに気づくと彼女は慌てて弾くのをやめたばかりか、ピアノの前から飛び退ったのだ。

「原さん。」

呼びかけると、前のほうの席でぶつ切りの黒髪が小さく弾むのがわかった。

「——ピアノ、弾ける。」

席にすわったままこちらを振り向いた彼女が戸惑ったように小さくうなずいた。

「じゃあ原さんにおねがいしてもいいですか。」

議長がすかさず原さんに確認を取る。なに、あのふたり、と声が聞こえる。お互いを推薦しあつてるよ。原さんと御木元さんで仲よかつたっけ。そんなことはどうでもいい。少しでも音楽をやる気のある人と組みたいだけだ。

(宮下奈都「よろこびの歌」による)

問1 本文中の部、歯牙にもかけられず、おざなりな の意味として最も適当なものを、それぞれアからエまでのの中から選び、記号で答えよ。

	a		b
	歯牙にもかけられず		おざなりな
ア	無視され問題にもされなくて	ア	他の人々と特に変わらない
イ	話題になつてもつまらなくて	イ	いつも同じで決まりきった
ウ	比較する基準にもならなくて	ウ	皆ふざけてばかりいて楽な
エ	勝負の相手と見なされなくて	エ	その場限りで間に合わせの

問2 本文中に、歌を利用して(1)いることへの軽い憤り とあるが、なぜ私は憤りを感じたのか。その理由として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から選び、記号で答えよ。

- ア 合唱コンクールのポスターの言葉の裏側に、生徒たちを望ましい方向へ誘導しようとするひそかな意図を感じたから。
- イ 歌うことそのものを大切にしたいと心のどこかで感じており、歌を何かに役立てようという発想に反発を覚えたから。
- ウ 合唱コンクールのスローガンが、それほど盛り上がっていない学校行事の実態とかけ離れていて不愉快に思ったから。
- エ 気持ちを合わせて歌うことができれば、自然にクラスの全員が仲良くなるという考え方自体に賛成できなかったから。

問3 本文中の……線を引いた二つの段落「そういえば胸を打たれていた。」は、小説の展開上どのような働きをしているか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から選び、記号で答えよ。

- ア 熱心に取り組んでいる他クラスの練習風景を描いて、合唱コンクールに対する「私のクラスの独特な無関心さを浮き彫りにしている。
- イ 去年の「私」が合唱コンクールに熱意を感じた場面を描いて、今年になってからの「私」の冷ややかな態度との対比を際立たせている。
- ウ 本当のところは歌声に関心を持っている「私」の内面を描いて、後に合唱コンクールの指揮者を引き受けることになる伏線にしている。
- エ 去年の合唱で歌に感動した「私」の体験を描いて、合唱コンクールに魅せられたい参加を決めることになる「私」の姿を暗示している。

問4 本文中に、翌週のホームルームで議題が合唱コンクールのことになったときも、私は窓から外を眺めていた。とあるが、このときの「私」を説明したものとして最も適当なものを、次のアからエまでの中から選び、記号で答えよ。

- ア 歌に最適な季節を迎えているが、合唱コンクールに冷淡なクラスにあきらめを感じている。
- イ 話し合いに無関心な態度を取りつつも、心のどこかで去年の合唱のことを思い浮かべている。
- ウ クラスでの話し合いにほとんど注意が向かないまま、音楽への道について漠然と考えている。
- エ 音楽大学の受験対策に頭が一杯で、高校生活最後の合唱コンクールにも全くの無関心でいる。

問5 本文中に、^③声が素直で救われた。とあるが、これはどのようなことを表しているか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から選び、記号で答えよ。

- ア 自分たちにはない才能を持つ人を仲間はずれにするようなクラスの中で、自分に好意的な人もいることがわかり、「私」の気分が少しは晴れたということ。
- イ 互いの気持ちを探り合ってばかりいる話し合いの中で、素直できっぱりとした推薦の言葉が、面倒くさいと思う「私」の気持ちを吹き飛ばしたということ。
- ウ 音楽家の娘であることを隠す「私」を非難する空気が漂う中で、こだわりのない素直な発言が、罪悪感を抱く「私」の気持ちを軽くしてくれたということ。
- エ 面倒なことは誰かに押し付けようとする雰囲気の中で、「私」に指揮をしてほしいという気持ちのこもった言葉に、「私」の嫌な気分が薄らいだということ。

問6 本文中に、^④うなずいていた。とあるが、これはどのようなことを表しているか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から選び、記号で答えよ。

- ア 同級生の飾り気のない言葉に驚くと同時に、それを聞いて「私」の心の奥にしまわれていた歌への素直な思いがふと胸をよぎり、思わず承諾してしまったということ。
- イ 話したこともない相手から推薦を受けて意表を突かれると同時に、畳みかけるように議長に促されて、わけのわからないままつい首を縦に振ってしまったということ。

ウ 思いがけない展開にたじろぐと同時に、これ以上断るのは「私」を推薦してくれた彼女に悪いと感じて、乗り気ではなかったものの引き受けることにしたということ。

エ 友人の素直な賞賛の言葉に戸惑うと同時に、やってみたいというひそかな思いを今さら言い出すこともできず、人に言われて仕方なくという形で承知したということ。

問7 本文中に、秋の体育祭と文化祭が終わると、急に空が高くなる。空気の匂いが変わる。香ばしさが風にかすかに混じり、住宅地の中を抜けて行くだけなのに、みよりの季節が近づいているのがわかる。ようやく穏やかな日々が戻ってくる。とあるが、この表現はどのような効果をあげているか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から選び、記号で答えよ。

ア 夏から秋にかけての美しい景色が「私」の新鮮な感動を伴って描かれるとともに、嫌な行事も後から思えばすがしく感じる「私」の心を表現している。

イ 「私」の繊細な感性によってとらえられた季節の移り変わりが鮮やかに描かれるとともに、煩わしいことがやっと終わった「私」の解放感を表現している。

ウ 豊かなみよりのを思わせる秋の情景が「私」の視点から簡潔に描かれるとともに、節目の季節を迎え少しずつ成長していく「私」や友人の姿を表現している。

エ 暑かった季節がさわやかになっていく様子が感傷的な筆致で描かれるとともに、この後「私」や周囲の人々に訪れることになる劇的な変化を表現している。